

# 柿の豆知識

‘いやそこは柿知識では…。でもここは豆で号’

柿は日本を代表する果実の一つである。日本を代表する果実のため、その果実が生る柿の木は日本の民家に非常に多い。日本に住む方なら、「そういえば実家にも柿の木があったなあ」という思いを抱く方も少なくはないであろう。当方も以前は実家に柿の木があった。なぜ日本の民家にはこのように柿の木が多いのであろうか。意外と知らないことである。そこで本新聞では、この謎に迫るべく、(正解かは分からないが)日本の民家に柿の木が多い理由となる柿の豆知識を整理したい(柿なので、柿の豆知識ではなく柿の柿知識じゃないの? という問答はさらりと流していただきたい)。

柿は大きく渋柿と甘柿に区別される。不完全甘柿なる中間的な柿も存在するが<sup>1)</sup>、民家に多くあるのは、完全に渋いか、完全に甘いかのいずれかであろう。形状に関しては、丸いのから、やや先の尖った丸いの、あるいは平べったい四角いのと様々である。今回、新聞の検討材料として提供された柿は、平べったく四角いタイプである。その柿を図に示す。図の上が上面、下が側面である。このように平べったく四角い柿の形状およびこの柿の生産地から類推すると、これは完全甘柿の一品種である富有柿



図 提供された柿

になるであろう。むろん甘柿の代表であり、食用に適する。一方、渋柿は生での食用に適さず、干し柿等にして渋を抜くことが必要となる。この渋はシブロールと言われるタンニン性物質に由来し<sup>2)</sup>、乾燥させることでこのタンニンが可溶性から不溶性となり、結果として渋味がなくなる<sup>3)</sup>。このようにして渋柿を食用化するにはひと手間がかかる。しかしながら、日本にある柿の木でも、渋柿の木も決して本数は少なくはなく、これを全て食用としていたにはあまりにも不生産である。それでは、なぜ渋柿の木も日本では少なくないのであろうか。

実はこの渋であるタンニンを利用した製品がかつての日本に多くあった。まだ渋柿が青いうちに採取し、砕いて、煮詰めた汁に柿渋<sup>4)</sup>と言われるものがあり、これを布等に塗ることでその布等の水への耐水性和腐食性が増すことが知られている。当時、柿渋を利用した代表的な製品には、合羽や傘あるいは魚網などがあった。特に魚網は縄が主体であり、その縄の耐久性を増すためにも当時の漁業では柿渋が欠かせなかった。一時は漁業を営む各民家でも柿渋が作られるほどであり、その天然の防水・防腐剤となる柿渋は非常に重宝されていた。その影響から、甘柿だけでなく渋柿の木も民家に多い理由がここにある。しかしながら、この柿渋の欠点は臭いが凄かったようで、これを生産していた浜一帯では悪臭が漂っていたようである。やがて柿渋の生産量を増すために柿渋だけを作る専門家も現れ、専業としていた集落には渋柿の木が多い<sup>4)</sup>。このことから、かつての柿は食用だけでなく、柿渋という天然の防水・防腐剤として利用もあり、日本の生活に欠かせない果実であった。

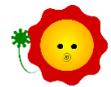
1) <https://ja.wikipedia.org/wiki/カキノキ> (閲覧 2015. 11. 10)

2) <http://www.mint-j.com/fruit/01/k07.htm> (閲覧 2015. 11. 10)

3) <https://ja.wikipedia.org/wiki/干し柿> (閲覧 2015. 11. 10)

4) 今井敬潤: 柿渋-ものと人間の文化史 (115)-. 法政大学出版局, 2003.

# 植かき新聞



植物いきいきサークル

第89号

発行者: 犬丸、河野